自然人のための本箱

野性日記

岡田昇

野性日記

岡田 昇

岩波書店

野性日記　自然人のための本箱

一九九二年四月二六日　第一刷発行©

定価一四〇〇円
（本体一三五九円）

著者　岡田昇（おかだのぼる）

発行者　安江良介

発行所　〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 03-3265-4111（案内）

印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-004088-X

目次

野性の眼

北帰行 2
野性の眼 30
タイメンを追う 57
ユックの森 87
ノーザン・テリトリー 106

地の果ての動物記（シルエット）

氷海の狩人——オオワシ 132
氷海の獣——ゴマフアザラシ 137
大地の化身——エゾシカ 142

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春風バム――キタキツネ 147
青い闇の巨鳥――シマフクロウ 153
孤空の覇王――オジロワシ 158

腕力写真家走る

壁、壁、壁 164
冬の海へ沈 176
極光直下 186
笑うサンデーアドベンチャー 196
ブルー・コメッツを撃て 206
銀の雪降りしきる 218
あとがき 229

野性の眼

北帰行

一九八八年一一月

深夜の国道三三五号をパジェロでとばす。ライトには降りだした大粒の雪だけが映っていた。ひっきりなしにワイパーが雪の結晶をぬぐう。後方からライトがまぶしく輝きだしたかと思うと一〇トンの大型トラックがアッという間に僕の車の横に現われる。派手なキャバレーのネオンのようなデコをぎらつかせたカラ積みのトラックが次々と、雪煙をまきあげフルスピードで追い越しては消え去っていく。

車窓に映るシーンはまるで無声映画を見ているような静かな世界。ヒーターを最小にしてあるため車内はひんやりとした冷気が全身を包み、目は冴えていた。パット・メセニーのカセットをつっこみリズミカルな音を聞く。

これで冬の知床に来るのは何度目だろうかとふと思う。四季それぞれ北海道の風土の良

さはあるだろうけど、僕はやはりあの荒涼とした最果ての風景に走るビシッとした寒気がたまらなく好きなのだ。

冬は烈風を呼びゆるやかな大地にブリザードを走らす。エゾマツとトドマツの森を震撼させ雪が乱舞し、動物や植物を一気に埋めつくす。おだやかすぎる日本の自然の中でここだけは確かな生身の息吹が聞こえてくるのだ。

「そったら幾度もここさ来んなら、いっそ住んでしまえばいいべ。ヒコーキ代やガソリン代だって、たまったもんでねぇべさあ」

確かにそう思う。住んでしまえば、ある部分は非常に楽になるにちがいない。

取材からのトンボ返りで夜中になったり、原稿書きで夜更けまでガタガタしていたりして、その明け方に東京から東北自動車道に車を走らせ、フェリーを乗り継ぐと、まる二日間かかるわけだ。北極圏や南米の最南端パタゴニアへ行くのとさほど変わらないぐらいの時間になってしまう。

あるいは、カメラ機材やキャンピング道具を含むその他もろもろの装備をジュラルミンのでかケースにぶっ込んで先に現地に送り、取材先から連続して飛んで行く。それでも知

床に入るには、まる一日は十分かかる。
毎度のこと睡眠不足で後頭部が熱くなったり、体力を消耗して、激しい虚脱感に襲われるのだ。
「あーあ、このかったるさ、いやだ、いやだ。この荷物の半端でない重量」
それでもパジェロのアクセルを目いっぱい踏み込んで、自力で北へ向かっているのだと思うと、心の奥底で熱いものがジーンと流れる。よーし、行くぞーと、決意と気合いが同時に入ると、思考回路のスイッチが知床極寒冷地仕様にスコンと変わり全身に力が甦ってくる。
ここ七年間、冬場だけでも、数えてみたら一〇往復し、滞在期間はトータルで一七か月間いた勘定になる。夏場を入れたら、二十数往復の二二か月である。
しかし、何回通い、何か月いたかなどということはどうでもいいことなのだ。
「こっちでも、なんとか食えるから住めばいいべさあ。家なんかオラが見つけてやる」
と、親身になって幾度も言ってくれる猟師のおやじもいるけど、自分の性格がわかっているから、居ついたら緊張感がゆるみ、だらけてしまうのは想像にかたくない。

昔から、絶えず直感と嗅覚で肉体を動かして行くうちに思考がめぐっていくほうだから、到底一か所には落ち着けるわけがない。まだまだ僕には、行きたい大地や会いたい人間がたくさんいる。ましてや、フリーランスカメラマンという職業意識が腰を落ち着かせてはくれないのだ。

撮るという客観性を含む行為を続けるためには、あまり、身近にどっぷりと浸ったりすると、偏狭的な視野に陥りがちである。絶えず、フレッシュな刺激を、血を注入しながら撮影に臨むのが自分にとって、いちばん合っている。

東京にいると、自然に忙しさの渦に巻き込まれてしまうのだが、それも決して嫌いなわけではない。ましてや、やりたい仕事の性質上、スタートのポジションが東京にあることでソク動けるため、好都合なのだ。

七年前の一月の吹雪の日、利尻からもう一つの北の最果て、知床半島に流れてたどりついた。利尻山という、人間を拒絶するかのように海上にそびえ立つ圧倒的な山とは違い、強烈に闘争本能を刺激する地ではない。凍てつくオホーツク海に、ヤジリのごとく鋭く突き出した半島の中央に連なる山稜は、意外なほどおだやかな顔を見せていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しかし、海岸線に落ちる崖ふちに軒を並べる異様な御殿の町並み、そして小さな港の異様な喧噪が、一晩中煌々と赤い光帯のエネルギーをほとばしらせていた。流氷期のスケソウダラ漁に、人口わずか八〇〇〇人にも満たない町が祭りのように華やいで見えた。何か血が騒いだ。

今まであった知床の真白いイメージのキャンバスから彩がスウッとにじんできた。

風の町羅臼。

強烈な寒気の中で不思議な熱気に当てられた。僕は、その渦の吸引力にズンズン引き寄せられていった。

スケソウを漁るのは、漁師たちだけではない。

流氷と共に北の海や大地から、トド、アザラシの海獣の群れやオオワシ、オジロワシの海ワシの群れが次々南下し、渡って来ていた。国後との幅、わずか二十数キロの根室海峡。冬場三か月の生命の密度といったらすさまじく増大するのである。ひとシーズン過ごすごとに、そんな生命のざわめきにグイッと強い引力を感じてのめり込んでいったのだ。

やがて、下界を徘徊しているうちにそのおだやかな知床連山からの眺めが気になった。

盟主、羅臼岳（一、六六一メートル）。豊満な乳房を思わせる山容で、そのトップは若い乳首のごとくツンと立っている。沖に出て山稜を望むと北西の強風が吹きつけるため、よく巨大なレンズ雲がかかるのだ。あの頂に立って下界を見てみたいものだと思った。

「いんや、いんや、いんやあ、獲物もいないあのテラテラに輝く羅臼岳にわざわざ登るっていうかあ。何考えてんだあ、都会の人間は」

やっとたどりついてバスを降りると
待っていたのは今年最低の寒い日だったよ
バックをひっさげ外に出ると
たちまち耳が凍りついたよ
ここは終着の街
もう失うものなんてないさ
僕にはラウスブルースがある
ここはさいはての街

もう失うものなんてないさ

シロクマの越冬地で有名になったカナダ、ハドソン湾の西岸、最果ての町、チャーチル、そのチャーチルブルースをもじったラウスブルースを長身で髪の長い男がギターを弾き国道わきに腰かけて歌っていた。その日も雪がチラついていた。

「どこから来たのだい」

くだらない聞き方をしてしまった。ヤツは黙っていた。

「まだ二年さ」

ヤツはポツリと言った。その意味がつかめない。

「旅の途中だ。冬はどんどん北上して北海道の北端まで行って歩き、夏は暑さを求めて南西諸島の島々を渡り歩いて、そのつなぎは土方のバイトさ。アラスカやインドも行ったけどオレにはこっちが合っている。気持ちが安らぐっていうか、風土かな」

年はいくぶん僕より上だろう。よく見ると髪に白いものがまじっている。脇にウイスキーのポケットビンが空になってころがっていた。色のあせたカリマーのザックにシュラフ

とマットそしてヤカンがくくりつけてあった。

スタイルといい二〇年前にタイムスリップしたような今どきめずらしいヤツだと思った。

「今日は相泊(あいどまり)まで行ってキャンプし、なんとか岬までたどりつきたいと思っている」

僕は黙ってヤツを終点までのせて行った。

初冬の知床連山はすでに真っ白く覆われて国道にもうっすらと降り積もっていた。一〇月中旬を過ぎるとウトロ・ラウス間の観光横断道路は雪のため通行止めとなるため、秋の紅葉狩りの観光客がドッと押し寄せた後は本来の静けさを取り戻す。

サケ・マスの定置網漁も一段落した半島は、流氷の到来を待ち、冬のスケソウの延縄(はえなわ)漁にそなえた、いわば休息のひとときを迎えて静まりかえるためシケれば、昼間でさえ、一層人通りが少ない。

国道の両わきに立ち並ぶ家はどれも鉄筋コンクリート二階建てのリッパな御殿だが、四角ばってどことなく新興宗教の集会所のような家ばかり立ち並び異様に映る。

しかし子供たちだけは、どこでもそうであるように、下校時の道くさでカバンをしょったまま雪だらけになってキャッキャと騒いでいるのだ。最近見ることのまれな赤いほっぺ

の小学生たちになにかホッとするものを感じるのだ。

九月下旬に出会った眩しいほどの新雪の山々が忘れられなくて、僕は完璧な冬山の装備に替え食料をザックに詰めこんで、再びやってきたのだった。

「おそらくヒグマはまだ冬眠に入っていないべ、気をつけろう。この秋は冷夏のせいで山にあまり実がなっていなかったからな。それはそうと食料は十分に持ったか。まあ、あんたにそんな心配は無用だったな。したっけ、あんたがやって来ると必ずここの天気は崩れるでやあ」

地元の猟師のおやじが出がけに笑ってそう言った。

「わやだあ、どうもならんわ」

羅臼の山仲間たちは暗くたれこめた雪の山稜をながめてはためいきをつき、誰もいっしょに山へ行くなどとは言わなかった。しかし、冬への扉は開かれていた。

天候の回復の見込みもないまま僕はひとりで稜線へと出かけた。

目指す羅臼岳は、一六六一メートル、道東でもナンバー・ワンを斜里岳と競う美しい山

だ。標高こそ低いがそれこそ海抜ゼロに近いところから登山することになるから、たとえば北アルプスの三一九〇メートルの穂高岳を玄関口の上高地から登るのと同じくらいの高度差になる。なかなかのアプローチである。

羅臼平への登りで僕は長グツを冬用のダブルのプラスチックブーツに替えて、スキーのストックをとりだした。

それまでガスって今まで何も見えはしなかったが、足もとにうっすらと雪が積もって登山道は一筋の白い道となって乳白色のガスの中へと続いていた。しばらく行くと左岸の岩壁が屏風のようにそそり立ち、そのあたりから急登になった。

体を動かしているとさほど寒さは感じない。湿気を含んだ霧の粒子がまつ毛や頬を濡らした。

途中、雪道をジグザグに横切るようにエゾシカとキツネの真新しい足あとがあった。そのほかは見渡す限りの白い海が続いていた。大気はピタッと静止していた。

こういったつかみどころのない風景の中を歩いていると時間の感覚が自然と薄れていった。その乳白色に果てしなく続く風景を漂流していると、自己の存在が圧倒されているの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com